

方剂名	効能	生薬組成	
		主治および証	病機 方意
書籍			
瀉下剤 寒下剤 1			
だいじょうきとう 大承気湯	峻下熱結	<p>大黄 12g・芒硝 9g・枳実 12g・厚朴 15g</p> <p>先ず枳実・厚朴を煎じ、次いで大黄を入れ2～3分煎じて滓を除き、芒硝を溶かして分2で服用する。十分な便通があれば中止する。</p>	
傷寒論	<p><主治></p> <p>熱結腸胃（陽明病腑実証）</p> <p>発熱、悪熱、日晡潮熱、意識障害、うわごと、汗が出る、口渴、尿が濃く少ない、便秘あるいは悪臭のある水様下痢、腹満、腹痛、圧痛がつよく触れさせない、舌苔は黄厚で乾燥し甚だしいと焦黒色や芒刺を呈する、脈は沈実あるいは沈遅で有力などで、手足の冷え、ひきつり、狂躁状態などがみられることもある。</p> <p><病機></p> <p>風寒が化熱して裏に入るか、風熱の邪が口鼻から裏に侵入し、熱邪が熾盛になって化燥して陽明胃腸の積滯と結びつき、燥屎を形成して停滞した状態である。風寒の化熱入裏は傷寒論の陽明腑実証で一定の時間経過がかかるのに対し、風熱入裏は温熱病気分証の熱結腸胃で経過が早く重篤である</p> <p>熱邪が裏に内結して熾盛になり、体表に洩れるので高熱と強い熱感（悪熱）が生じ、夕方（日晡）は陽明の経気が盛んになる時刻で、邪正相争が熾盛になるために、夕方になると発熱、熱感が強くなる（日晡潮熱）。熱邪が心神を上擾すると意識障害、うわごと、甚だしいと狂躁状態が生じ、熱邪が津液を外迫するので汗が出る。このとき、陽明は四肢を主るので、四肢に汗が出ることが多い。熱盛で津液を消耗し、口渴、尿が濃く少ない、舌苔の乾燥などがみられる。熱盛傷津で胃腸で燥熱が糟粕（腸内容物）と結びついて燥屎を内結させるので、便秘を呈す。ただし、燥屎が存在しているにもかかわらず、熱邪の燻蒸により腸内の津液が下迫されると、腐臭の甚だしい青色の水様便が流出することがあり、これを「熱結傍流」という。腸内の燥屎により腑気が阻滯されて気血が壅滯するので、腹満、腹痛、圧痛が強く触れさせないなどが現われる。舌苔が黄厚で甚だしいと焦黒や芒刺を呈するのは、燥熱穢濁の邪が上蒸していることを示す。裏で気機が阻滯されているために脈は沈実（有力）であり、脈気が阻滯されたときは遅を呈する。実熱の積滯内閉により陽気が阻滯され、四肢に達することができないときは四肢の末端が冷えるので「熱厥」と称するが、必ず発熱の後に冷えがみられるのが特徴である。熱邪が陰液を損傷し筋脈が栄養されなくなると、筋肉のひきつり、甚だしければ牙関緊急など、「瘵病」の症候がみられる。</p> <p><方意></p> <p>燥熱の邪と糟粕が結びついた燥屎が内結して気機を阻滯し、燥熱を更に増悪させているので、燥屎を排除することが最も重要である。</p> <p>苦寒泄熱、通便の大黄が主薬で、鹹寒軟堅、瀉熱通下の芒硝が補助し、燥屎を軟化すると共に瀉下によって熱結を除去する。苦温で寛中行気に働く厚朴と、苦寒で破気導滯に働く枳実は、腑気を通じて痞満を除き、大黄・芒硝の瀉下の効能を強める。全体で熱結を峻下する効能が得られる。</p> <p><参考></p> <p>先人は、本方（大承気湯）の適応を「痞、満、燥、実」の四つに帰納している。</p> <p>「痞」は胸腹部の痞塞重圧感、腹部が硬いこと、「満」は腹満感、抵抗、「燥」は腸内の硬い糞塊、便秘、舌苔の乾燥、「実」は腸内の有形の邪により腹部が硬く圧痛があることを、それぞれ示している。更に舌苔が黄、脈が沈、実をそなえる必要がある。</p> <p>熱結腸胃には、熱盛と傷津の症候があるが、清熱滋陰を行なっても効果はなく、燥屎が除去されないかぎり再燃する。攻下熱結の方剤によって、燥屎を除いてはじめて熱邪が消滅し、即ち攻下によって燥熱の邪が除去されると、それ以上の津液の消耗が止んで津液を保持することができる。</p> <p>本方（大承気湯）の煎煮の方法は、まず枳実・厚朴を煎じ、大黄は後下し、芒硝を溶解することになっている。大黄・芒硝は煎じる時間が短い方が瀉下作用が強いからである。</p> <p>『傷寒論』では大承気湯・小承気湯・調胃承気湯の三つが、陽明腑実証に用いられており、一般には「三承気湯」「承気湯類」と称される。</p> <p>本方（大承気湯）は<傷寒論>の方剤であるが、<温病条弁>にも引用されている。ただし寒邪入裏化熱の傷寒とは異なり、温病では熱邪による化燥傷陰が強いので、温燥の厚朴の量は少なくしている。</p> <p>日本での保険適応効能、効果</p> <p>腹部が硬く痞えて、便秘するもの、あるいは肥満体質で便秘するもの。常習便秘、急性便秘、高血圧、神経症、食あたり</p>		